

Title	「ソーシャル・サポート」研究の現状と課題
Sub Title	"Social support" research : the present state of arts and needed future directions
Author	稲葉, 昭英(Inaba, Akihide) 浦, 光博(Ura, Mitsuhiro) 南, 隆男(Minami, Takao)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1987
Jtitle	哲學 No.85 (1987. 12) ,p.109- 149
JaLC DOI	
Abstract	There have been numerous investigations of the effects of social support on well-being. However, we still know virtually nothing about why and how this connection exists. In this paper, conceptual, methodological, and theoretical problems in studying social support are reviewed and discussed. Following the three taxonomic categories of social support (support as social embeddedness, support as perceived, and, support as enacted) developed by Barrera (1986), discussion centers on delineating both advantages and disadvantages within each approach and suggesting an integrated strategy for future investigation.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-0109">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000085-0109</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「ソーシャル・サポート」研究の 現状と課題<sup>1)</sup>

稲葉昭英<sup>2)</sup>・浦 光博<sup>3)</sup>・南 隆男<sup>4)</sup>

## “Social Support” Research

—The Present State of Arts and Needed Future Directions—

*Akihide Inaba, Mitsuhiro Ura, and Takao Minami*

There have been numerous investigations of the effects of social support on well-being. However, we still know virtually nothing about why and how this connection exists. In this paper, conceptual, methodological, and theoretical problems in studying social support are reviewed and discussed. Following the three taxonomic categories of social support (support as social embeddedness, support as perceived, and, support as enacted) developed by Barrera (1986), discussion centers on delineating both advantages and disadvantages within each approach and suggesting an integrated strategy for future investigation.

1) 本稿は、昭和62年度慶應義塾学事振興資金の援助による『現代人の「移行」(socio-cultural and psycho-developmental transitions) をめぐる総合的研究』(研究代表者：南 隆男)の一環として用意された。

2) 慶應義塾大学大学院社会学研究科研究生(社会学)。

3) 関西大学社会学部講師(社会心理学)。

4) 慶應義塾大学文学部助教授(社会心理学)。

## 「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

ソーシャル・サポートとは、近年のアメリカにおけるコミュニティ心理学や社会心理学の領域で特に注目を集めている概念であり、それをめぐっての研究の過熱・隆盛ぶりは物理学における“超伝導ブーム”に匹敵する感さえも与えられる。そして、このような動向を紹介する邦文文献も最近ようやく散見されるようになってきた（例えば久田，1987 など）。しかし、ソーシャル・サポートとはそもそも何であるのか、と問えば、定義をはじめとする不鮮明な部分の多さ、理論的な整理を欠いた部分の多さに否応なく気づかせられる。

ソーシャル・サポートの重要性が叫ばれはじめ、経験的な研究の導入が図られつつある現在のわが国において、今もっとも緊要な課題は何であろうか。それはなによりもまず、①ソーシャル・サポート概念を理論的な地平において整序することであり、ついで②ソーシャル・サポート研究の問題点および課題の所在を確認することであり、そして③われわれ自らのソーシャル・サポート測度を開発し確立していくことではあるまいか。こうした基礎的な作業の完遂なくしては、アメリカでのそれに追随したひとつのフェッドの創発はあり得ても、“本家”でのブームが下火になるや、独自の蓄積もほとんど貯えることなく、おのずと消長していくサイクルが、またひとまわり繰り返されるだけのことのように思われる。

本稿では上記3つの課題の達成を図るべく、膨大な蓄積を見せているアメリカのソーシャル・サポート研究の現状を概観し、そこにいかなる問題と課題とが提起されているのかを展望する。

### 1. ソーシャル・サポートとは

#### (1) ソーシャル・サポートの定義とその変遷

結論から言えば、ソーシャル・サポートにはいくつもの定義が存在し、とくにコンセンサスを得ているものはない。そればかりか、ソーシャル・

サポートという曖昧な概念の破棄を主張する論者も少なくない (Barrera, 1986 など)。そして、われわれの主張も「ソーシャル・サポートを総称的概念として使用し、経験的な操作的概念としてはそれを使用しない」という意味で、Barrera (1986) ら後者の主張を支持するものである。

ここで重要なことは、すでに存在するソーシャル・サポートの定義のそれぞれが、① どんな立場からなされたものなのか、そして ② どんな問題をはらんでいるのか、を明確化することであろう。まずはソーシャル・サポートの研究史を跡づけながら、そのなかで定義の変遷を検討することとしたい。

ソーシャル・サポートは、もともと精神障害者の存在・発生についての空間的分布などに関する生態学的研究と、精神衛生学における「非専門家による援助資源 (lay resources)」の重要性についての指摘の双方のなかで案出され、注目を集めるようになった概念である。

とくに Cassel (1974) は、特定の人がストレスフルな状況 (例えばライフ・イベントなどの生起) において疾病を帰結するのに対し、一方で疾病を帰結しない人も存在することに着眼し、「社会的環境 (=社会的紐帯) のありようが疾病に対する人々の脆弱性を規定する」という仮説を立てた。そして彼は、社会的環境の改良・強化をもって、ストレスからの個人の保護に向けての実践的介入の手段と考えた。こうしてソーシャル・サポートという概念が初めて提唱されたが、彼はしかしその概念を明確に規定はしなかった。

同様に Caplan (1974) は、個人の発達の・状況的危機に対して重要な影響を及ぼす社会的環境として、ソーシャル・サポート・システムという概念を提出した。このソーシャル・サポート・システムとは「個人に対してフィードバックをもたらし、また個人が他者に対して抱く期待を充足してくれる、継続的な社会的紐帯 (集合体) のうちに存在する」と概念化さ

れ、このサポーター（援助的）な他者たちは、危機に直面した人の①心理的資源の動員を助けることで、個人の感情的な負担を抑制する、②課題を共有する、③危機に対処するための物質的・手段的資源および認知的指針を提供する、という3つの主要な機能を果たすものとして定義された。ここではソーシャル・サポートおよびサポート・システムが、健康・モラル・状況の統御感などの諸結果 (outcomes) に対して持つ予測的妥当性ゆえに重要視され、概念そのものの構成的妥当性が深く追求されることはなかった。言い換えるならば、ソーシャル・サポートがどのように表現され、知覚され、機能を果たすのか、といったメカニズム/過程に関する視点が欠落し、サポート・システムについても、その構造特性・境界・成立・発達などについて深く触れられることがなかったのである。

今日のソーシャル・サポートをめぐる諸論議はこの周囲に端を発するものであり、Gottlieb (1981) は、こうした初期のソーシャル・サポートについてのとらえ方が、根源的な理論的検討を抜きにしたものであったことを指摘している。いわば、関係的な特性として、相互交渉 (transaction) のプロセスとして、あるいは自己についての認知として、といったソーシャル・サポートの原理をとらえようという指向が欠如していたのである。

Caplan のほかには、Cobb (1976) がソーシャル・サポートを「個人に、当該個人が世話をされ、愛され、尊重され、相互的な責務をもったネットワークのメンバーである、と信じさせうるような情報である」、すなわち「情緒的援助・尊重的援助・ネットワーク援助をもたらす、個人間のレベルで交換される情報」としてこれを定義した。彼の定義の特徴は、何よりも情報の概念を前面に押し出していることにある。さらにまた実体的な援助よりも、より表出的な側面でのサポートの有効性が強調され、「個人による認知」という主観的な側面から言及がなされていることが注目し得る。こうした性格を持つ彼の定義は、経験的な調査研究への適用が比較的容易であったがゆえに、相互作用論的な流れに沿った隣接諸分野へと摂取

された。例えば、家族社会学における家族ストレス論がこれに相当する。家族ストレス論においては「状況の不明瞭性」(ambiguity)をもって家族のストレス状態と見なす考えかたがあり、情報概念を用いた Cobb のソーシャル・サポート概念はこの「状況の不明瞭性」を明瞭化するものとして容易に導入可能であったからである (McCubbin ほか, 1980 など)。しかし、手段的な側面の援助をソーシャル・サポートの範疇から除外したことは、Thoits (1982) をはじめとする批判を招来した。

ライフスパン発達心理学および社会心理学の立場からなされた Kahn & Antonucci (1980) のコンボイ (convoy) 概念も非常にユニークなソーシャル・サポート概念として注目される。彼らは、幼児期の愛着関係 (attachment relationship) がその成長・発達に重要であることを指摘した Bowlby (1969) らの愛着理論をもとに、個人の一生を通じての対人的相互作用にまでこれを外延的に拡張した。そして成人期における愛着関係に相当するものとして、社会的役割関係における、あるいはそれを超えて行われる援助的相互作用、すなわちソーシャル・サポートを措定するのである。彼らは、ソーシャル・サポートを「愛情 (affect), 肯定 (affirmation), 援助 (aid) という3つの要素の1つあるいは2つ以上を含む個人間の相互交渉」と定義する。このソーシャル・サポートは個人的ネットワークを通じて授受されるのであり、そしてライフ・コースを通じて変化するこうしたソーシャル・サポート・ネットワークを「個人の護衛隊」すなわち「コンボイ」と呼んだのである (詳細な解説として藤崎, 1984 がある)。

彼らの主張にはいくつかの重要な指摘がある。まず、個人間の関係性を類別しようという意図が見られること。彼らはコンボイ構造を、非役割依存的 - 役割依存的という連続的概念によって、その関係性を3つの同心円構造としてモデル化している。この考え方自体は、社会的ネットワーク論における「多重送信的 (multiplex) 関係 - 単一送信的 (uniplex) 関係」(Boissevain, 1974) と酷似するものではあるが、個人間の関係性をソーシ

## 「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

シャル・サポートの要素、すなわち愛情、肯定、援助の相互交渉と対応させて類別を試みていることに何よりも独自の点がある。必ずしも明確に言及されているわけではないが、関係性が非役割依存的であるほど3つの要素すべてが授受され、役割依存的であるほど援助のみの授受が行われる、と彼らの文脈から判断できる。また、この結果として家族・親族・友人・近隣・専門家といった社会的カテゴリーによってではなく、個人にとっての関係性の濃淡によってそのネットワーク構造が整序されるのである。ソーシャル・サポートを個人間の関係性の深さ（質）から論じ、その関係性の類別を図る試みはそれ以前の研究には見られなかった視点である。

ライフ・コースの視点を導入したことも彼らの立場の独自の点である。個人が加齢（aging）とともにどんな関係性を必要とするのか、どのようにサポート・ネットワークの変化を経験するのか、といった問題は非常に魅力的なテーマとしてソーシャル・サポート研究者のみならず、（ライフスパン）発達心理学者、家族社会学者、老年学者などの注目をも集めることとなった。

しかし、その主張の独自性は貴重であるとはいえ、ソーシャル・サポートの根源的なメカニズム／過程についての理論的検討を棚上げしたかたちで彼らの論旨は構成されていると言わざるをえない。さらに、彼らの「愛情・肯定・援助」による関係性の類別という主張も、最近の彼らの報告（Antonucci, 1985 など）からは削除されている。関係性の類別という試みそのものは重要であるものの、おそらくそれを単純に「愛情・肯定・援助」などの要素的概念によって経験的に区分することには無理が生じていることがうかがえる。このような理由からであろうか、彼らのソーシャル・サポート概念が他のソーシャル・サポート研究者によって準拠されることは少ないようである。

そのほか、最近有力な定義とされているものに House (1981) の定義がある。彼は、ソーシャル・サポートを「①感情的な関わり（情緒的サポー

ト), ② 手段的援助 (手段的サポート), ③ 情動的援助 (情動的サポート), ④ 評価的援助 (評価的サポート) のうちの 1 つあるいは 2 つ以上を含む個人間の相互交渉」と定義している。ここでは, Kahn & Antonucci と同様に, 相互交渉 (= 行動) レベルで定義がなされていることが注目に値しよう。ただし彼の場合, 関係性の濃淡と対応づけてサポートならびにその要素を定義しているわけではない。彼の定義に対して高い評価を与える論者も少なくない (山本, 1986 など) が, しかし後述するように, 微細な側面にまで立ち入ればこの定義もまた問題をはらんでいる。

ソーシャル・サポートについての定義はこのほかにも無数あるが, 通常依拠される頻度が高いもの, 注目すべきものは大略, 以上のごときものと考えてよいだろう。

## (2) ソーシャル・サポートの定義における問題点

以上の定義が共通に持つ問題点は, 第 1 にいずれもが「これこれについて援助的 (サポーティブ) であるが故にソーシャル・サポートである」といった「循環的な言明」をその内に含んでいることである。こうした定義に依存するかぎり, 特定の情報, 行動, ないし関係が当該個人にとって援助的であるときにのみ, それをソーシャル・サポートと呼ぶ, ということになってしまう。

この点について Wilcox & Vernberg (1985) は, ソーシャル・サポートは「人の困難への対処に, そして新たな対処能力の開発に対して援助となる行動として考えられているが, 結果を見ずして特定の行動が援助的であるかどうかは決定できない」と述べている。有力とされている既述の House の定義にしても, 特定の行動のなかに「援助 (的な要素) がある」と誰によって, どうやって判定されるのであろうか。サポートの送り手が援助を意図して特定の行動を提供したとしても, 受け手がそれを「援助」として受け取るとは限らない。後に詳しく見るごとく, 援助的と思われる



行動が反健康維持的な結果をもたらす場合もまた存在するのである。この場合にはこれはソーシャル・サポートに該当しない、ということになる。逆に、個人にとって「援助的なもの」のみをサポートと呼ぶならば、それは結果的事態からものを言うことにほかならず、個人の健康や安寧に効果を及ぼすのはあたりまえということになってしまう。

概念の操作化を進め、そしてその構成的妥当性を高めるためには、特定の結果的事態に依存しない、またサポートの送り手と受け手という2つの要素を考慮した定義が必要とされる。

こうした点から、ソーシャル・サポート現象に2者間(以上)の「交換」の概念を導入し、また送り手-受け手間に別個に存在する「知覚(動機)」の概念を取り入れた Shumaker & Brownell (1984) の定義は一步先を進んでいるといえる。彼らは「ソーシャル・サポートとは、『受け手の安寧(well-being)を増すことが意図されている』と、送り手・受け手によって知覚される、2人以上の人間のあいだでの資源の交換である」と定義する。この定義においては、特定の結果的事態との関連のうえでのサポートへの言及は避けられている。行為者の意図・知覚に依存してサポートは図1のように分類される。この図において、計9ケのパターンが提示されるが、定義によりうち4つ(うすアミの部分)はサポートの範疇に含まれない。送り手が意図しても受け手がそれを知覚しなかった場合、また送り手が意図せずとも受け手が意図ありと受け取る場合など、この類型はユニークな視座を提供している。また、ソーシャル・サポート研究における社会的交換理論の導入の必要性を積極的に主張している点も、今後の動向を考えるうえで興味深い。

しかし、この定義に完全に準拠するかぎり経験的な研究への応用は限られることも、また銘記されるべきである。すなわち、サポートの受け手-送り手双方の知覚と行動を問題にするかぎり、閉鎖的な、実験室的な状況でならばともかく、コミュニティなどの規模での経験的研究での把握は実

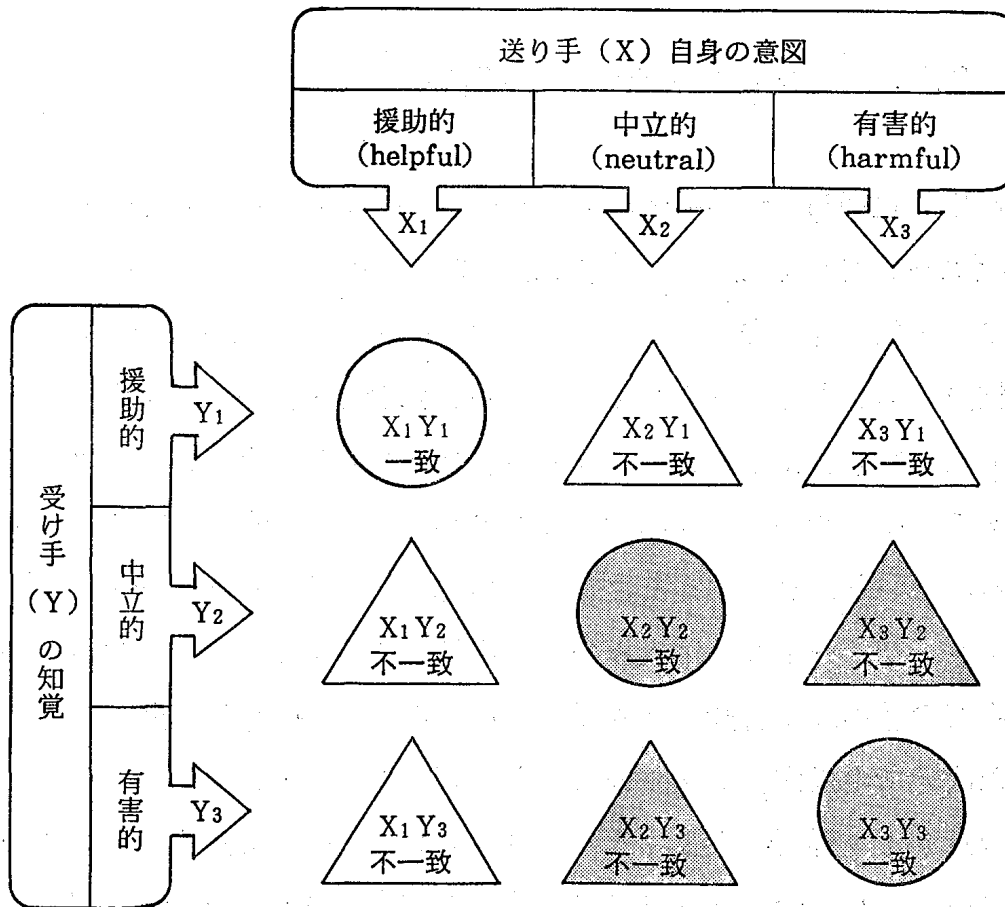


図 1. Shumaker & Brownell (1984) によるソーシャル・サポートの分類  
(定義によりうすアミ部分はソーシャル・サポートの範疇に入らない)

質的に不可能に近いからである。

このようにどの定義にも少なからず問題が含まれているために、コンセンサスはなかなか得られそうもない。

これまでのソーシャル・サポート研究においては以上のような定義そのものにかかわる問題に加えて、概念の操作化においても相違が見られ、そのために研究結果の比較可能性の消失（あるいは相互の排斥）という事態が継続的に引き起こされてきた。われわれとしては、むしろ多様な定義が存在することを素直に認め、そのうえで「何を測定しているのか」、つまり、操作化の手続きを明確化することで多様なアプローチの併存を生かすことが肝要か、と考える。

## 2. ソーシャル・サポート研究におけるアプローチ

Gottlieb (1981) はソーシャル・サポートの構成概念中に含まれる3つの意味について論じている。彼によれば、ソーシャル・サポートとは①人々の社会的結合・参加についてのレベルに関して定められたもの、②特殊な構造特性をもった社会的ネットワークにおける人々の相互作用の副産物として定められたもの、③人々の資源群への接近可能性について定められたもの、の3つのレベルにおいてそのエッセンスを要約することが可能である、という。言い換えるならば、準拠する定義のいかんを問わず、ソーシャル・サポートは、①人々の属する社会的ネットワーク、②ネットワーク中での援助的な行動、③知覚されたサポートの入手可能性、という異なった次元での操作化があり得る、ということである。

この点をより鮮明に主張するのが Barrera (1986) である。彼はこれまでのソーシャル・サポート研究における操作化のありようを、①社会的包絡 (social embeddedness)、②知覚されたサポート (perceived support)、③実行されたサポート (enacted support)、の3つに区分する。そして、これら3つの操作化は相互に関連性が低く、それゆえに経験的研究における知見も整合しないと指摘する。ここから彼は、ソーシャル・サポートという概念の破棄と、それに代わる既述の3つの操作的概念への「ソーシャル・サポート概念の下位分割」を主張するのである。彼の指摘はすこぶる示唆的であると思われる。ソーシャル・サポートをこのように区分することでこれまでの拡散的な経験的研究ならびにその知見を整理・統合し得る可能性がひらけ、また変数間の関連をより正確に理論化することが容易になるように思われるからである。

以下では大きくこの Barrera の主張に準拠して、社会的包絡としてのサポート、知覚されたサポート、および実行されたサポートの順に研究動

向を概観し、それぞれに内在する問題点を検討していきたい。

(1) 社会的包絡 (social embeddedness) としてのソーシャル・サポート

・社会的紐帯の存在の査定とその問題点

Barrera (1986) は社会的包絡を「個人が、その社会的環境において重要な他者たちに対して持つ関係」と定義している。そして彼はその測定方法として、①社会的紐帯の存在についての広範な指標を使用するもの、および②社会的ネットワーク分析を使用するもの、の2つを区分する。

社会的紐帯の存在を測定するという方法は、具体的には配偶者の有無・兄弟の存在・友人との接触などを指標とするもので、直接にソーシャル・サポートを測定しているというよりは、そこにサポートが存在することを仮定して間接的にそれを測定しようとするものである。それゆえに分析用具としての精度は低く、変数の定量的把握にも限界がある。また、Holmes & Rahe (1967) らの Social Readjustment Rating Scale (SRRS) のようなライフ・イベントの存否を問うストレス・メジャーと質問項目が重複する危険性も大きく (Thoits, 1982), 必然的に「低サポート-高ストレス」という結果を生みやすい点にも、よくよく注意する必要がある。

しかし、社会的紐帯の存在は、当該個人にアイデンティティや自己評価 (self-esteem), 自己効力 (self-efficacy) を与え、その心理的安寧を増すことが理論的には想定されるから (Thoits, 1982), こうした測定法によって得られた知見の重要性もまた看過してはならない。隣接諸分野においてこうした指標を用いている研究 (Thoits, 1986; Essex & Nam, 1987 など) からの知見をソーシャル・サポート研究の観点から解釈し直すことも有意義なことのように思われる。

・社会的ネットワーク分析とその問題点

ソーシャル・サポート研究はその概念的性格ゆえに早くから社会的ネットワーク分析と結びついた。社会的ネットワーク分析は、もともと社会学・社会人類学において、従来の構造-機能主義的方法に対して批判的に導入されたアプローチであり、当初から家族・親族・近隣・友人などの社会的カテゴリーが分有する社会的機能の解明、あるいは集団を越えた幅広い社会関係の同定、といった「社会構造と個人の関係」の解明に分析の力点がおかれていた (Boissevain, 1974)。

ソーシャル・サポート研究においては、むしろこうした構造的な視点は欠けており、例えば Wellman (1981) はこうした点を厳しく批判している。

近年の社会的ネットワーク分析は計量化が大きく進展し、密度 (density)・中心性 (centrality)・到達可能性 (reachability)・対称性 (symmetry)・境界密度 (boundary density) などのさまざまな指標の開発 (詳しくは Hall & Wellman, 1985 を参照) によって、計量的分析手法としての一領域を確立するに至っている (わが国のデータに社会的ネットワーク分析の手法を適用した例として、「組織内個人行動」を対象にした Morishima, 1986, 「住民運動への参加」の分析を試みた大畑, 1985 などがあげられる)。これらの指標を用いて「社会的ネットワークの構造がいかにサポートの入手可能性に影響を及ぼすか」(Wellman, 1981) を解明することが最近のこのアプローチによるソーシャル・サポート研究の中心となっている。ただし、本来の社会的ネットワーク分析は、特定のネットワーク (あるいは領域) に属するとされるすべての成員から回答を得、複数のデータから数値が算出されるが、コストがかかるなどの点で、実際には単一個人からの回答によってその人にとってのネットワークの構造のみを測定する「個人的ネットワーク分析 (personal network analysis)」による代替がなされることが多い (Hall & Wellman, 1985)。

こうした方向での研究の蓄積は非常に多い。古典的なものでは、精神障害者のネットワーク構造の分析を試みた Tolsdorf (1976) がまずあげられる。また、大学生のネットワーク構造とサポートへの満足度の関係を検討し、「より密度の低いネットワークをもつ人ほどサポートへの満足度が高い」ことを発見した Hirsh (1979)、離死別女性および既婚の大学復学者のネットワーク構造と「生活変化への適応」の関連について分析し、「密度が高いネットワークを持つ者ほどサポートへの満足度・心理状態が悪い」「多次元にわたってサポートを提供してくれる友人関係をもつ者ほど、サポートへの満足度が高い」ことを指摘した Hirsh (1980) の研究も注目すべきである。さらに Wilcox (1981a) は遡及的な方法ながら、離婚前のネットワーク構造と離婚後の適応の関係について検討し、「ネットワーク中に占める親族の比率が高い (=ネットワークの密度が高い) 者ほど適応が悪い」「離婚前の夫婦のネットワークの重複度が高い者ほど、つまり境界密度が高い者ほど、適応が悪い」ことを明らかにした。また障害児を抱えた家族のネットワークを一般の家族と比較して分析した Kazak & Wilcox (1984) は、「障害児をもつ親たちのネットワークの規模はより小さく、密度が高く、夫婦のネットワークは境界密度が高い」ことを発見し、ネットワーク成員との互酬性の維持のために障害児の世話はほとんど母親 1 人に任せられ、母親の過重負担を招来していることを指摘した。Bogat ら (1985) は大学生を対象に Sarason ら (1983) の Social Support Questionnaire (SSQ) を使用して、多様なサポートを提供する“何でも屋”(generalist) と、特定のサポートのみを供与する“専門屋”(specialist) の存在がサポートの満足に及ぼす影響について検討し、何でも屋の存在がサポートの満足の度合いに強い影響力を持つことを示した。このほかにも無数に研究成果は存在するが、とくに注目すべきものとして以上があげられる。

ただし、こうした研究の隆盛にもかかわらず、このアプローチにも固有の問題がいくつか存在する。問題の第 1 は、特定のネットワーク変数と結

果変数との間に一定の関係が見出されても、それを説明する理論が欠落していることが多いことである。一般的な説明は、密度が高いネットワークでは相対的に規模が小さく、あるいは親族の比重が強く、皆が同質的な社会的関係に属していることが多いために多次元的なサポートの供与が受けられない、すなわち状況の変化に応じた必要なサポートの入手が制限されるから適応が悪い、といった因果連鎖の仮定によるものである。感覚的には了解可能であるとはいえ、直接にこうした仮説が検証されているわけではない。ネットワーク構造とその中で行われる援助的な行動、およびそれに対する知覚の関係を精細に検討しなければ、しょせんは「仮説」の域を出ない。結局のところ研究の多くは変数の関係を「発見」し、アドホックな説明をその都度加えているというのが現状である。

第2の問題は、個人的ネットワーク分析の手法を用いる場合に、そこでネットワーク変数として測定されているもの（特にネットワークの規模）が心理学的変数の影響を受けていると思われること、すなわち現実のネットワークの様態そのものよりも、パーソナリティの特性を測定している可能性がある、ということである。例えば、このアプローチに属するメジャーとして前出の Sarason らの Social Support Questionnaire (SSQ) が挙げられるが、SSQ の使用に際してもこの問題が浮上してくる。SSQ は全部で27項目からなり、特定のサポートを供与してくれる人の名前を9人まで表記させ、サポート別ネットワーク規模＝人数 (SSQN) とそれに対する満足度 (SSQS) を5件法で問うものである。そのうちの6項目のみが Sarason ら (1983) で報告されているが (資料1を参照)、外向的な人ほど人数を多く報告する傾向があることなどが指摘されている (Sarason *et al.*, 1983, 1985)。Gottlieb (1985) の指摘にもあるように、これではネットワークとして測定されているものも、パーソナリティ変数の投影に過ぎない可能性が大いにある。こうした点からすれば、個人的ネットワーク分析によって単純に人数を問う方法よりも、多大な労力が必要とされるが

精度の高い、ネットワーク成員全員から回答を得るネットワーク分析の手法を用いる方が望ましいといえる。

第3の問題は、ネットワーク変数と結果変数の関連を因果連鎖としてとらえることの問題である。ネットワークの構造とは畢竟個人がおかれている社会的状況を縮約した情報にほかならず、ネットワーク構造が個人に特定の状態を生起させている、と直ちに仮定することには相当な飛躍がある。すなわち、ネットワーク構造から因果的に個人の状態を説明する可能性があると同時に、ネットワーク構造自体が特定のストレッサーによる結果状態である可能性もまたあるわけである。このような厄介な問題は、時系列的な方法の使用、あるいはネットワーク構造と其中でなされる行動との関連を検討することで初めて解決が可能になる。

以上のように、ネットワーク分析の使用にあたっては、理論的説明においても、経験的研究においても、慎重な考慮が必要とされるのである。

## (2) 「知覚されたサポート」としてのソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートを「主観的に知覚された経験」として把握するアプローチは、これまでの研究の主流に位置するものであり、最も多くの経験的研究の蓄積を持つ。このことの背景には、Cobb (1976) 以来のソーシャル・サポート概念における心理学的伝統の存在、および経験的な質問紙調査への適用の容易さがあげられよう。しかし、それ以上にこのアプローチの周辺に提起されたソーシャル・サポートのストレス緩衝仮説 (stress buffering hypothesis) と直接仮説 (direct hypothesis) の検証の問題が、ソーシャル・サポート研究全体の中心的テーマとして隆盛を極めたことがあげられる。

まずはこの2つの仮説をめぐる議論から出発しよう。

### ・緩衝仮説と直接仮説



## 「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

先の定義の変遷についての節で触れたように、ソーシャル・サポートが注目された理由は、それが持つ健康増進機能ないしはストレス緩衝機能にある。そしてこれをめぐって提出された仮説が緩衝仮説と直接仮説である。

緩衝仮説では、ソーシャル・サポートは「ストレッサー（とくにストレスフルなライフ・イベント）が存在しないときには心理的な症候には直接の効果をもたらさないが、ストレッサーが存在するときにそれを緩衝する機能をもつ」と想定される。すなわち、一定のストレッサーに直面したときにソーシャル・サポートが低い人は心理的症候においてダメージを受けやすいが、ソーシャル・サポートが高い人はダメージを受けにくい、ということになる。換言すれば、サポートの有無はストレッサーが存在するときのみ違いとなって表われるということである。

一方、直接仮説ではソーシャル・サポートが「ストレッサーがあろうが無かろうが心理的症候に直接の効果及ぼす」とされる。この場合、ストレス緩衝という機能は見い出されない。平常時も、そしてストレッサーに直面した際にも人の心理的症候においてはソーシャル・サポートの多少による一定の差異が存在する、というのがこの考え方である。こうした緩衝仮説、直接仮説はそれぞれ図2、図3のように示すことでその違いを理解しようとするのが一般的である（詳しくは Cohen & Wills, 1985 などを参照）。

そしてこの対立する（とされる）2つの仮説を検証するためにさまざまな実証研究が行なわれてきた。予防的介入を図る臨床家、地域精神衛生学者たちにとっては、これらの識別が実践上に重要な意味をもったためである。とはいうものの、この決着は基本的についでいない。測定法の違いによって、いずれの仮説も検証されている、というのが実情である。

しかし、測定法の違いはさておき、緩衝仮説 / 直接仮説という対立は本当に本質的なものなのだろうか。経験的な変数の連関の違いはともかくと

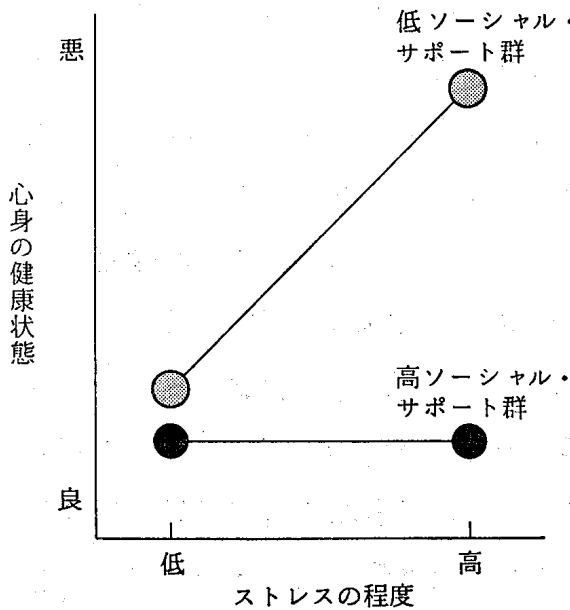


図 2. ソーシャル・サポートの緩衝仮説

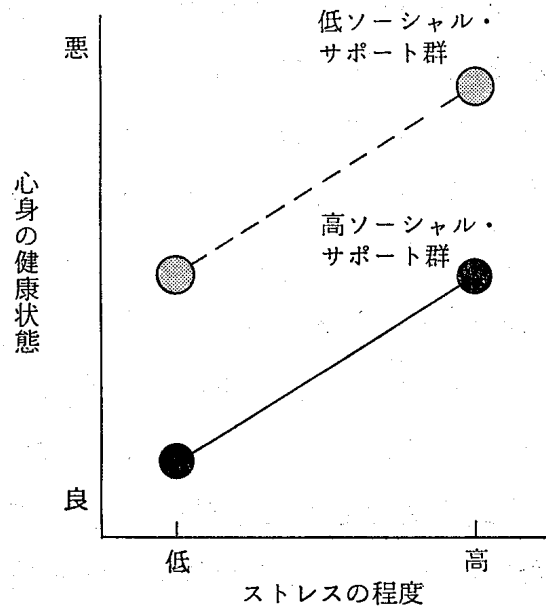


図 3. ソーシャル・サポートの直接仮説

して、理論的にはサポートの有無それ自体が人に影響を及ぼすことは当然考えられるし、またそれが危機的事態においてより顕著にその差異を露呈させることも予想される。また、サポートの種類によっては平常時のモラル維持などに有効なものもあるだろうし、特定の危機状況に適合的なものもあるはずである。理論的には必ずしも両者は排反的な性格を持つものではない。

最近の動向としては、両者を対立する仮説とは見なさず、サポートのある側面は緩衝効果を、別の側面は直接効果を及ぼすもの、と考えるほうが一般的である。Cohen & Wills (1985) は、特定のストレスフル・イベントによって惹き起こされる「対処要件」と、提供されるサポートが一致したときのみ緩衝効果が生じる、としている。つまり、特定のストレスに見合った特定のサポートが存在しなければ、それ以外のサポートがどんなに存在しようとも、平常時とストレス時に差異は生じないということである。とすれば、実際に使用されるメジャーがストレッサーに対応したサポ

ートを測定しているか否かが、直接効果・間接効果のどちらが検出されるかを大きく規定することになる。これについて彼らは、分析に用いられるメジャーが構造的・包括的である場合（社会的ネットワークへの包絡など）には直接効果が、そしてより特定の機能的側面を扱っている場合には（それが対処要件と一致する要素を含んでいる限りにおいて）緩衝効果がそれぞれ見出される、と既存の諸研究を検討した後に述べている。また、メジャーが「サポートの認知的入手可能性（すなわち、知覚されたサポート）」を査定している場合には緩衝効果が示されやすく、「サポートの利用（後出の実行されたサポート）」を査定している場合には緩衝効果が示されない、という。この問題に関する彼らの説明は充分とはいえないが、後述するごとく「知覚されたサポート」と「実行されたサポート」という操作化の違いがこうした事態を引き起こしていると思われる。

以上の Cohen & Wills の主張は基本的に「緩衝効果か直接効果か」という違いはメジャーの違いから帰結する、というものである。しかも彼らの論理展開からすれば、対処要件の違い、すなわちイベントの特性の差異によって緩衝効果が見い出されたり直接効果が見い出されたりする、ということになる。とすれば、緩衝効果/直接効果という対立は何ら本質的なものではなく、イベントおよびメジャーの性質によって規定されるということ、この検証に労力を投入することはあまり意味のあることとは思えない。それよりも特定のイベントによってどんな「対処要件」が生じるのか、それに対応するサポートは何か、を明確化することが先決であろう。

#### ・「知覚されたサポート研究」とその問題点

既述のように、このアプローチにもとづく研究は数多い。詳細は Cohen & Wills (1985) などに譲るとして、代表的なものとしてはいち早く階層的重回帰分析を導入して、緩衝仮説 - 直接仮説の検証を試みた Wilcox (1981b) がまずあげられる。他に測定方法に問題はあるものの、男女間の

職場・家庭におけるサポートの効果の違いを明らかにした Billings & Moos (1982), 長期的な観察法によって「ソーシャル・サポートの認知はどのような相互作用過程から生ずるのか」を検討した Kirmeyer & Lin (1987), 時系列的な方法でソーシャル・サポートの直接効果を見出した Holahan & Moos (1981) などの業績は注目に値する。

しかし、こうした実証研究の盛行とは裏腹にこの背後には大きな問題が存在する。すなわち、既述のネットワーク分析の節においても問題として示されたような「本当に測定したいものを測定しているのか」という構成的妥当性の問題である。

これについては Gottlieb (1985) が非常に鋭く指摘している。彼はソーシャル・サポートへのアプローチについて、心理学的パースペクティブと相互交渉的 (transactional) パースペクティブの2つを区別する。

心理学的パースペクティブでは、人々が接近可能と感じるサポートのソース・量・質・タイプなどについての情報を把握することに重点が置かれる。当然のことながら「知覚されたサポート」にもとづくソーシャル・サポート研究は「社会的包絡」を査定するものとともにこの部類に属することになる。ここではサポートの心理的感覚が測定されるのであって、ネットワーク・メンバーとの社会的相互作用において表現される、現実の、あるいは経験されたサポート (相互交渉的パースペクティブ、すなわち後述する「実行されたサポート」としてのソーシャル・サポート) が測定されるのではない。

既述のように、社会的包絡の部類に属するメジャーである Sarason ら (1983) の SSQ では、外向性や幼年期における剥奪経験などのパーソナリティ変数との相関が高くなるという傾向がある。知覚されたサポートを測定する Procidano & Heller (1983) の Percieved Support Scales (PSS) は、家族・友人からの利用可能なサポートが査定されるが、これは一時的なムードや状態によって大きく左右される。また、Cohen ら (1985) の

Interpersonal Support Evaluation List (ISEL) は個人を対象に、各種のサポートの「知覚された入手可能性」を査定するものであるが、自己開示 (self disclosure) や自尊心などの指標との関連があり、また Moos (1981) の Family Environment Scale (FES) における社会的風土 (social climate) との相関が高くなるという結果が報告されている (Cohen *et al.*, 1985. なお、PSS と ISEL は部分的に重複する項目が存在するため、比較的よく使用される ISEL を資料 2 として提示した。また、この ISEL を修正したものとして稲葉ほか、1986 がある)。

このように、「知覚されたサポート」は回答者の特性や状況に大きく依存するものであり、可変的な社会過程よりも安定的 (stable) な心理学的変数を実際は測定している可能性が大きい。これは、各尺度が再テスト法などの結果において時間的な安定性が高いことから理解される (Gottlieb, 1985)。

つまるところ、心理学的な方向に傾斜したこのアプローチでは、ソーシャル・サポートが実際はパーソナリティ傾向・社会的信条・自己認知などを反映した「性向」(disposition) と同値なものとして概念化されてしまうのである。Gottlieb は、結果としてここではソーシャル・サポートという概念が孤独 (loneliness) の概念と酷似するものになっている、と指摘している。とすればこれはソーシャル・サポートの“アイデンティティ”にかかわる深刻な問題である。概念の構成的妥当性について、いま一度入念な検討が要されることは言うまでもないであろう。

#### ・「知覚されたサポート」の健康増進メカニズム

知覚されたサポートが健康増進機能を果たすメカニズムは明瞭にされているわけではないが、最近では Lazarus (1981) らのストレスに対する認知的評価プロセスのモデル中における第 1 次評価・第 2 次評価の概念と関連づけて「緩衝効果」の観点から説明がなされることが多い (Cohen

& Wills, 1985; Gottlieb, 1985; Wilcox & Vernberg, 1985). 第1次評価とはストレスラーによる危機の判定(イベント評価), 第2次評価とは対処レパートリーについての評価(資源評価)を意味する. 第1次評価は第2次評価によって再評価される. そしてこの2つの評価を経て最終的にストレスラーへの反応が決定される, というのである.

知覚されたサポート(の入手可能性)は, 第2次評価において危機状況に対し, より「問題的でない・深刻でない」方向への再評価を引き起こすとされ, ソーシャル・サポートが主要な役割を演じるのはこの時点である, とされている(Wilcox & Vernberg, 1985). すなわち, ソーシャル・サポートの知覚された存在が, ストレスラーに対する対処の容易さを当該個人に想起させ, その結果としてストレスラーに対する当初の認知が和らげられる, というのである. ただし, 既述のように「対処要件」と「知覚された入手可能性」が一致しなければ, こうした再評価は起こらない. この意味で両者が一致したときのみ, ソーシャル・サポートはストレスラーに対する初発の感情的反応をより縮小化する, つまり緩衝機能を果たす, とされる(図4を参照).

これとまったく異なった, 社会学的な相互作用論から「知覚されたサポート」の健康増進メカニズムを精力的に理論化している Thoits (1982, 1985) の主張も注目に値する. 彼女は, 「心理的障害やディストレスを最

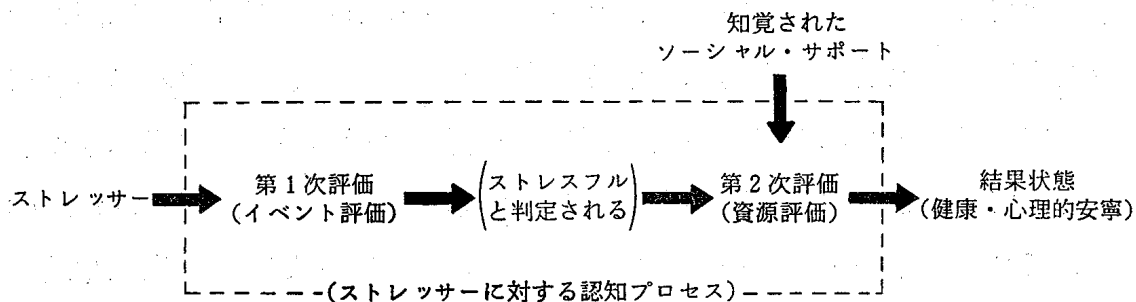


図 4. 知覚されたサポートの健康増進メカニズム  
(Cohen & Wills, 1985 を修正)

も強力に予測する要因は社会-情緒的サポート (socioemotional support) である」とする。そしてこうした情緒的サポートは社会的役割関係から得られるとし、「役割関係がいかに関心的状態に影響するかを、役割関係のなかに基礎づけられる自我との関連から理解しなければならない」と主張するのである (Thoits, 1985)。すなわち役割関係は個人の自我と生活に意味と目的を与えることで一連のアイデンティティや所属感を与え、また他者からの評価をもたらすことで肯定的な自己評価の資源となり、さらにその適切な課題達成・役割遂行は状況の統御感・克服感、内的満足や自己承認をもたらす。個人はストレスに遭遇することで「自我の危機」にさらされるが、こうした他者との役割関係がその自我の危機を補う時にのみ「サポートの緩衝効果」が生じるというのである。

特定のストレスによって生じた自我の危機のタイプと、知覚されたサポートの間に不一致がある場合にはサポートは機能せず、緩衝効果が生ずるか否かは特殊ストレス的である、という点は先の Cohen らの主張と同一である。サポートが「自我のある側面に生じた危機を補強することで緩衝効果が生ずる」とする彼女の主張は「ストレスに対する認知」ではなく「脅威にさらされた自我」との関連でサポートを論じる、という意味で非常にユニークであり、また社会学的である。

しかし、以上のどちらを採用するにせよ、このような論理展開はソーシャル・サポートおよびその効果をまったく個人内部の認知プロセスとして片づけてしまうことを意味する。ソーシャル・サポートが「実際に困難を除去するのではなく、困難に対する見方を変える、あるいは自我についての見方を変える」に過ぎないならば、この概念は行動科学的立場に立つ者にとってすこぶる魅力の薄いものになってしまう。加えて、「人々の認知」としてソーシャル・サポートを仮定するならば、いったい、臨床家や地域精神医学者による「介入」はそもそも可能なのだろうか。人々がいかにしてサポートの知覚を持つに至るのか、そして状況に対する見方を変えるこ

とが根本的な問題の解決に結び付くのか、といった問題を解決せねば、介入への道は開けない。そしてこれらの問題はいまだに未解決である。

このように、この立場はソーシャル・サポート研究中において理論化・実証化が最も進んでいるアプローチであるとはいえ、「知覚されたサポート」の方向にのみ研究が傾斜していくことには、大きな危険が伴うと見なければならぬ。

### (3) 「実行されたサポート」としてのソーシャル・サポート

#### ・「実行されたサポート」とは

最後に取り上げるのが Gottlieb (1985) が「相互交渉的パースペクティブ」と呼ぶところの「実行されたサポート」としてのソーシャル・サポートである。これは Barrera ら (1981) による Inventory of Socially Supportive Behaviors (ISSB) (資料 3) によって代表されるように、「援助的な行為を受けた頻度」を問うものである。ISSB は包括的に援助行動の頻度を問う一方で、情緒的サポート、実体的・物質的援助、認知的情報・フィードバック、指令的指導、という 4 つのサポートの次元を査定していることが Stokes & Wilson (1984) によって示されている。

このアプローチにおいてはネットワーク構造やサポートへの満足度との関連を査定する研究で、その成果が目立っている。例えば、ISSB はネットワーク中の信頼できる人の数・規模・密度といったネットワーク変数との相関構造が男女間で異なることが報告されている (Stokes & Wilson, 1984)。これについては、性別役割の社会化という点から説明がなされており、自律・独立を要請される男性はごく親しい関係の中でのみサポートの授受が行われる (ネットワーク中の信頼できる人の数が援助的な行動の頻度を規定する) のに対し、女性は感情表出的な側面が許容されるために、とくに親しい関係でなくともサポートの授受は行われる (信頼できる



人の数が援助的な行動の頻度を規定しない) という。こうした現実の援助的な行動の態様を把握しうること、そしてその結果として個人のサポートに対する認知のメカニズムや、ネットワーク構造と個人の状態との関係を明らかにしうることにこのアプローチの強みがある。

・「実行されたサポート」における理論と問題点

理論的な整理のうえでは、援助的な行動は既述のストレスに対する第1次評価・第2次評価を通じて状況がストレスフルであると判定され、当該個人が対処を展開する過程で索求・供与されるもの、と考えられている。しかし、理論的な問題はさておいて、援助的な行動の頻度を測定することの問題性は各所にある。

まず第1に援助的な行動の頻度が初発のストレスの程度に大きく依存する、ということである。ストレスが大きい人ほど対処をし、サポートが供与される傾向があるのは必然である。このため、同時的な変数の連関上は、極端なケースでは援助的な行動が多い人ほどストレスを抱え、心理的安寧や生活満足度が低いような事態が起こってしまう。これは先の直接効果・緩衝効果とは全く逆の現象であることを意味する。こうした場合、初発のストレスの大きさを同質的なもののみでコントロールし、2時点で測定を行わなければサポートの程度から結果変数の予測をすることが不可能になる。

Barrera (1986) は「サポートの量と適応の程度が負の関連を示す」現象が、こうした見かけ上の「疑似効果」による場合と、実際にサポートが受け手に否定的作用（あるいは潜在的逆機能）を及ぼしている場合の2通りの可能性がある、と指摘している。わが国で三宅島の噴火被災世帯の調査を行った石原 (1987)、木下 (1987) らの報告は前者の可能性を示唆している。この場合は潜在的に保有されているサポートが危機の程度に応じて顕在化する程度が高まること、言い換えればサポートの頻度が危機の大きさ

の裏返しということになる。また、家族員のサポートと老人のモラルの関連を検討した Arling (1976), Stoller (1985) らは、「サポートが老人の自尊心を傷つける」ことを指摘し、後者に相当する内容を報告している。この両者を識別するには、継時的な研究に移すよりほかはなく、例えば問題とする変数間のクロス・ラグ相関を吟味するなどが考えられる。いずれにしても後者におけるサポートの否定的効果はこれまでの循環的な（知覚された）サポートの定義からは決して見い出されなかった現象であり、今後さらに注目されるべきことと思われる。

これに関しては最近の Antonucci (1985) の見解が興味深い。彼は友人と家族という、異なった社会的カテゴリーからのサポートが、異なった基準で判定され、その結果として個人に及ぼす影響が異なったものになる、という。すなわち、家族からの危機時のサポートは義務的なものであり、厳格な期待のコードの中でなされるものであるから、この結果サポートが供与されることが当然と見なされ、あまり個人に影響力をもたらさない。ところが、サポートが供与されないと、この場合は「義務からの逸脱」として大変にネガティブな効果をもつ（ストレスを生む）というのである。一方、友人は当該個人に何ら義務的な責務を持たないから、サポートを供与しなくともネガティブな効果は起こりにくく、逆にサポートの提供は非義務的であるがゆえに大変ポジティブな影響力をもつ、という。つまり、家族からのサポートはあまり個人の心理的な安寧に寄与せず、サポートがなされないときにのみ安寧を低下させるのにたいし、友人からのサポートは、供与されなくともあまり害はないが、その供与によって安寧に寄与する度合いが大きくなるということである。

彼の議論を拡張すれば、家族か友人かといった社会的カテゴリーの問題というよりも、より親密な関係～親密さが希薄な関係、といった関係性の濃淡の中に期待・判定基準などの相違が存在する、ということになる。彼の指摘は「過度のサポートは自尊心を損ねる」とする「サポートの逆機能」

の説明とは異質なもので、社会的交換理論・対人関係論などの立場からも非常に魅力的な主張となっている。

このように、行動レベルでのサポートの概念化には様々な可能性があるにせよ、一般的な命題の定立が非常に難しいという性質がある。特定の行動が効力を発揮するか否かは、ストレスの程度・サポートの適切性・受け手の評価によって異なると予想され、また、特定の行動が効力を発揮している場合/効力を発揮できないので継続されている場合、といった、時間的・過程的側面がどうしても概念中に内包されるためである。

社会的包絡、知覚されたサポートという2つのアプローチに比してこのアプローチにもとづく研究が今一つ振わなかったのも、こうした行動レベルでのサポートを把握することの難しさの裏返しとあってよい。Gottlieb (1985) は行動レベルでのアプローチに高い評価を与えているが、経験的検証において非常に面倒な手続きを要するという性格はふまえておくべきであろう。

### 3. 総括：ソーシャル・サポート研究の動向と課題

以上見てきたように、ソーシャル・サポート研究には定義・測定法・理論それぞれに未解決の問題が残されている。総括として Wilcox & Verberg (1985) を参考に、一定のコンセンサスを得ている議論のみを整理すると以下のようになる。

① ソーシャル・サポートとは多次元的概念であり、各種のサポート・カテゴリーをもつ。このカテゴリーの内容は先に述べたような House の定義や、Cohen らの ISEL 中に見られるようなサポートの機能的な類型に示されている。

② サポートはストレッサー特殊のあり方で機能する。ストレッサーに

応じて有効なサポートのカテゴリーは変化する。同時に、ストレッサーによって課される要請（対処要件）とサポート資源の間に一致があるときのみ、サポートはストレッサーのネガティブな効果を緩衝することに有効性を発揮する。

③ 心理学的パースペクティブと相互交渉的パースペクティブの2つが存在するが、操作性において容易であるが故に前者の視点からの研究が隆盛である。前者において測定されたソーシャル・サポートが、結果変数としての心理的安寧や精神的症候に非常に有意な説明力をもつことがいくつかの研究から指摘されている。しかしながら、知覚されたソーシャル・サポートという変数そのものが実は結果変数と同様な対象を測定している、というトートロジカルな側面を一面でもつ可能性 (Dohrenwend, *et al.*, 1984), 孤独感などのパーソナリティ要因の投影でしかないという危険性も考えられ、概念の構成的妥当性が問われかねない。

④ サポートの健康増進機能のメカニズム、サポートの知覚が生じるプロセスについての理論的説明が不足している。実践的介入においてソーシャル・サポートが持つ意味が重要とされている以上、これらの問題を早急に整理する必要がある。

図5は、本稿で問題としてきた3つのソーシャル・サポート概念の相互連関をモデル化したものである。さらに、Barrera (1986) を参考に、図5における変数の相互連関を整理すれば図6のようになる。これらの図からも理解されるように、ソーシャル・サポートは多義的概念であり、実際はその操作化の仕方によって変数の相互連関のあり方が異なったものになってしまうのである。ソーシャル・サポートについての理論化の作業は、こうした下位概念間でなされるべきである、と言えよう。

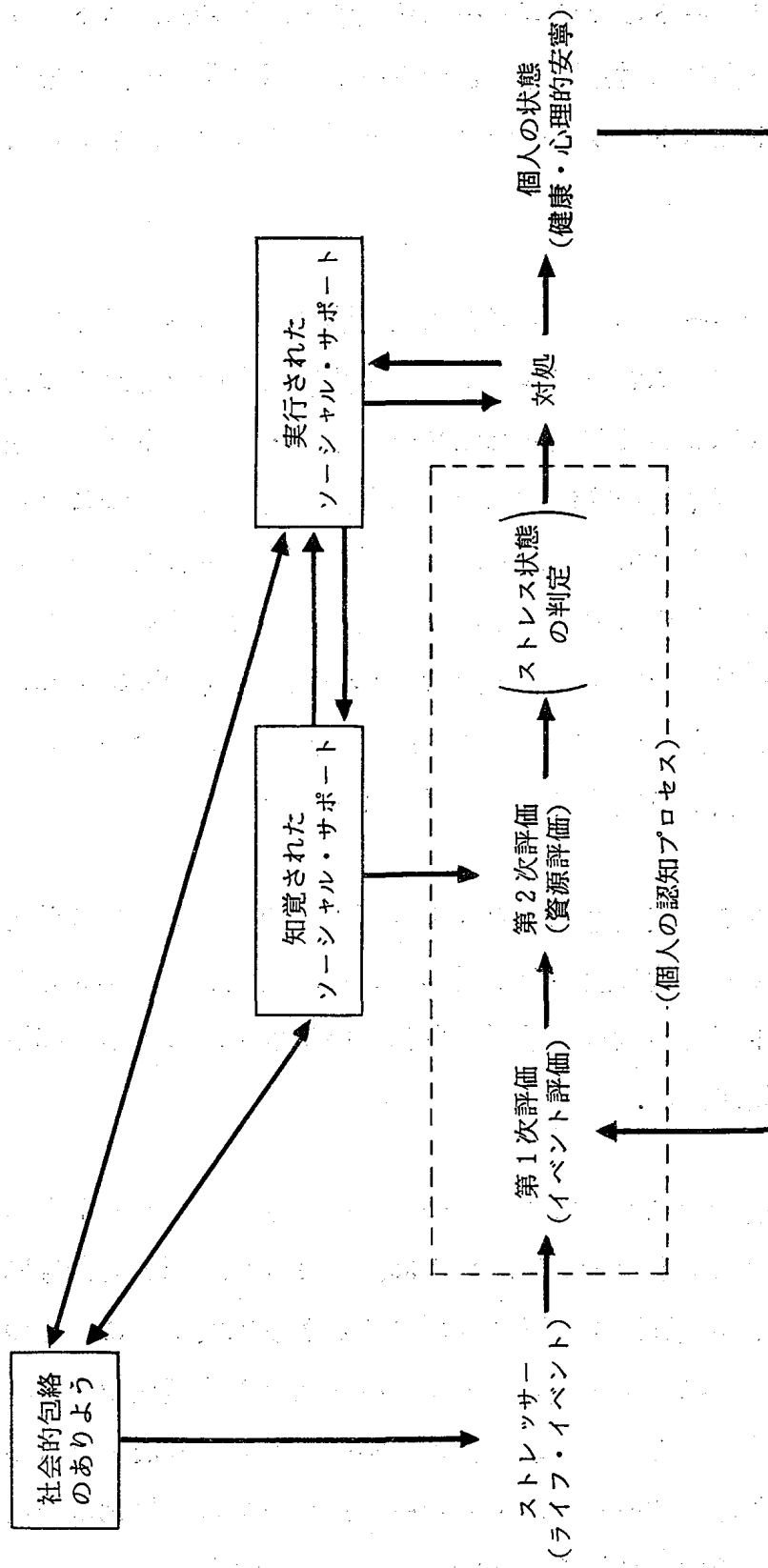


図5. 「社会的包絡としてのソーシャル・サポート」「知覚されたソーシャル・サポート」「実行されたソーシャル・サポート」の相互連関

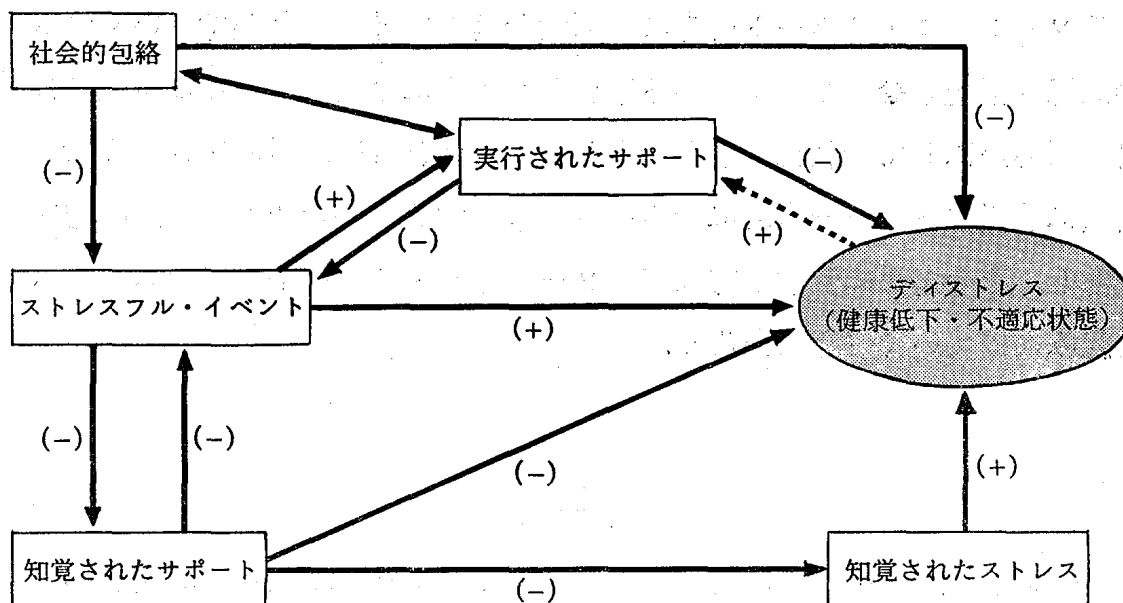


図 6. ソーシャル・サポートに関して想定される全変数の連関 (Barrera, 1986 を修正. 点線は疑似効果を示す)

ソーシャル・サポート研究は当初から個人の健康に対する予測的妥当性のみが強調され、構成的妥当性についての検討は後からつけ足されていた、という歴史をもっている。そしてその検討が進むほどさまざまな問題が浮上し、また概念の曖昧性も明らかにされてきた。

今後の経験的研究にとくに要請されることは、操作化の方法への十分な留意と、社会的包絡、知覚されたサポート、および実行されたサポート、の3つのアプローチ相互の連関の明確化に尽きるだろう。この意味では、ここ数年のアメリカの研究に見るごとく、ソーシャル・サポートの緩衝効果の追求にのみ固執することは、いささか動向に逆行するもののようにわれわれには思える。さらにまたソーシャル・サポートが万能特効薬ではないこと、すなわちその限界もよくよく理解されねばならない。

さまざまな問題を内包するものの、コミュニティ心理学・社会心理学・発達心理学・地域精神医学・家族社会学・老年学などの交差する領域として (南・浦, 1987; 南・稲葉・浦, 1988; 浦・南, 1987) ソーシャル・サポート研究の重要性が今後高まっていくことと予想される。アメリカにお

## 「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

けるソーシャル・サポート研究は、膨大な蓄積を進めるなかで、いくつもの問題を浮上させ、重要ではあるけれども容易には扱えないこの研究の性格を明らかにしてくれた。後発者としてのわれわれは、単にアメリカでの蓄積に追従する——一方的にサポートを享受する——のではなく、問題を共有し、その解決に資する方向で、ソーシャル・サポート研究のスクラムを組みあげていくべきであろう。

### 引用文献

- Antonucci, T. C. (1985) Social support: Theoretical advances, recent findings and pressing issues. In I. G. Sarason and B. R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*. The Hague, The Netherlands: Martinus Nijhoff Publishers. PP. 21-37.
- Arling, G. (1976). The elderly widow and her family, neighbors and friends. *Journal of Marriage and the Family*, **38**, 757-768.
- Barrera, M., Jr. (1986) Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, **14**, 413-445.
- Barrera, M., Jr., Sandler, I. N., and Ramsey, T. B. (1981) Preliminary development of a scale of social support: Studies on college students. *American Journal of Community Psychology*, **9**, 435-447.
- Billings, A. G., and Moos, R. H. (1982) Work stress and the stress-buffering roles of work and family resources. *Journal of Occupational Behavior*, **3**, 215-232.
- Bogat, G. A., Caldwell, R. A., Rogosch, F. A., and Kriegler, J. A. (1985) Differentiating specialists and generalists within college students' social support networks. *Journal of Youth and Adolescence*, **14**, 23-35.
- Boissevain, J. (1974) *Friends of friends: Networks, manipulators and coalitions*. Oxford: Basil Blackwell. (岩上・池岡訳, 1986. 友達の友達—ネットワーク・操作者・コアリッション—。未来社)。
- Bowlby, J. (1969) *Attachment and loss*. New York: Basic Books.
- Caplan, G. (1974) *Support systems in community mental health*. New York:

- Behavioral Publications. (近藤ほか訳, 1979. 地域ぐるみの精神衛生. 星和書店).
- Cassel, J. (1974) Psychological processes and "stress": Theoretical formulations. *International Journal of Health Service*, 4, 471-482.
- Cobb, S. (1976) Social support as a mediator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, 38, 300-314.
- Cohen, S., and Wills, T.A. (1985) Stress, social support, and buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357.
- Cohen, S., Mermelstein, R., Kamarck, T., and Hoberman, H. (1985) Measuring the functional components of social support. In I.G. Sarason and B.R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*. The Hague, The Netherland: Martinus Nijoff Publishers, PP. 73-94.
- Dohrenwend, R. S., Dohrenwend, B. P., Dodson, M., and ShROUT, P. E. (1984) Symptoms, hassles, and life events: Problem of confounded measures. *Journal of Abnormal Psychology*, 93, 222-230.
- Essex, M. J. and Nam, S. (1987) Marital status and loneliness among older woman: The differential importance of close family and friends. *Journal of Marriage and the Family*, 49, 93-106.
- 藤崎宏子 (1984) 老年期の社会的ネットワーク. 副田義也編. 日本文化と老年世代. 中央法規出版. PP. 89-148.
- Gottlieb, B. H. (1981) Social networks and social support in community mental health. In B. H. Gottlieb (Ed.) *Social networks and social support*. Beverly Hills: Sage, PP. 11-42.
- Gottlieb, B. H. (1985) Social support and the study of personal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 2, 351-375.
- Hall, A., and Wellman, B. (1985) Social network and social support. In S. Cohen and S.L. Syme (Eds.) *Social support and health*. New York: Academic Press, pp. 23-41.
- Hirschi, B. J. (1979) Psychological dimensions of social networks: A multi-method analysis. *American Journal of Community Psychology*, 7, 263-277.
- Hirsch, B. J. (1980) Natural support systems and coping with major life changes. *American Journal of Community Psychology*, 8, 159-172.
- 久田 満 (1987) ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題. 看護学研究,



20, 170-179.

Holahan, C. J., and Moos, R. H. (1981) Social support and psychological distress: A longitudinal analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 365-370.

Holmes, T. H., and Rahe, R. H. (1967) The social readjustment rating scale. *Journal of Psychosomatic Research*, **11**, 213-218.

House, J. S. (1981) *Work stress and social support*. Reading, Mass.: Addison-Wesley.

稲葉昭英・高橋 潔・小林和久・浦 光博・高根定信・南 隆男 (1986) 家族ストレス論による単身赴任家族研究の試み. *哲学*, **83**, 慶應義塾大学三田哲学会, 251-286.

石原邦雄 (1987) 噴火災害によるストレスと住民の適応. *人文学報*, **194**, 東京都立大学人文学部, 169-194.

Kahn, R. L., and Antonucci, T. C. (1980) Convoys over the life-course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes and O. G. Brim (Eds.) *Life-Span Development and Behavior*, **3**, New York: Academic Press, PP. 253-286.

Kazak, A. E., and Wilcox, B. L. (1984) The structure and function of social support networks in families with handicapped children. *American Journal of Community Psychology*, **12**, 645-661.

木下栄二 (1987) 自然災害への家族ストレス論の適用にむけて—1983年三宅島噴火災害を事例に—. *社会学論考*, **8**, 東京都立大学社会学研究会, 71-92.

Kirmayer, S. L., and Lin, T. R. (1987) Social support: Its relationship to observed communication with peers and superiors. *Academy of Management Journal*, **30**, 138-151.

Lazarus, R. S., and Folkman, S. (1984) *Stress, appraisal and coping*. New York: Springer.

McCubbin, H., Joy, C., Cauble, A. E., Comeau, J., Patterson, J., and Needle, R. (1980) Family stress and coping: A decade review. *Journal of Marriage and the Family*, **42**, 855-871.

南 隆男・浦 光博 (1987) 「ソーシャル・サポート」研究—予備的検討 (1)—. *日本社会心理学会第28回大会発表論文集*, P. 126.

南 隆男・稲葉昭英・浦 光博 (1988) 「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて—若干の資料—. *哲学*, 慶應義塾大学三田哲学会, **85**, 151-184.

- Moos, R. H., and Moos, D. S. (1981) *Family environment scale manual*. Palo Alto: Consulting Psychologist Press.
- Morishima, M. (1986) *Effects of intra-organizational network properties on employee behaviors, perceptions and attitudes: A case of an R&D organization in Japan*. Unpublished doctoral dissertation. University of Illinois.
- 大畑裕嗣 (1985) 近隣交際ネットワークと運動参加. *社会学評論*, 140, 18-31.
- Procidano, M., and Heller, K. (1983) Measures of perceived social support from friends and from family: Three validation studies. *American Journal of Community Psychology*, 11, 1-24.
- Sarason, I., Levine, H., Bashaman, R. and Sarason, B. (1983) Assessing social support: The social support questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 127-139.
- Sarason, I.G., and Sarason, B.R. (1985) Social support: Insights from assessment and experimentation. In I.G. Sarason and B.R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*, The Hague, The Netherland: Martinus Nijhoff Publishers, pp. 39-50.
- Shumaker, S. A., and Brownell, A. (1984) Toward a theory of social support: Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, 40, 11-36.
- Stokes, J. P., and Wilson, D. G. (1984) The inventory of socially supportive behaviors: Dimensionality, prediction, and gender differences. *American Journal of Community Psychology*, 12, 53-69.
- Stoller, E. P. (1985) Exchange patterns in informal support network of the elderly: The impact of reciprocity on morale. *Journal of Marriage and the Family*, 47, 335-342.
- Thoits, P. A. (1982) Conceptual, methodological, and theoretical problems in studying social support as a buffer against life stress. *Journal of Health and Social Behavior*, 23, 145-159.
- Thoits, P. A. (1985) Social support and psychological well-being: Theoretical possibilities. In I. G. Sarason and B. R. Sarason (Eds.) *Social Support: Theory, research and applications*. The Hague, The Netherland: Martinus Nijhoff Publishers, PP. 51-72.
- Thoits, P. A. (1986) Multiple identities: Examining gender and marital status differences in distress. *American Sociological Review*, 51, 259-272.

「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

- Tolsdorf, C. (1976) Social networks, support, and coping: An exploratory study. *Family Process*, 15, 407-417.
- 浦 光博・南 隆男 (1987) 「ソーシャル・サポート」研究—予備的検討 (2)—. 日本社会心理学会第 28 回大会発表論文集, P. 127.
- Wellman, B. (1981) Applying network analysis to the study of support. In B. H. Gottlieb (Eds.) *Social network and social support*. Beverly Hills: Sage, pp. 171-200.
- Wilcox, B. L. (1981a) Social support in adjusting to marital disruption: A network analysis. In B. H. Gottlieb (Eds.) *Social network and social support*. Beverly Hills: Sage, pp. 97-116.
- Wilcox, B. L. (1981b) Social support, life stress, and psychological adjustment: A test of buffering hypothesis. *American Journal of Community Psychology*, 9, 371-386.
- Wilcox, B. L. and Vernberg, E. M. (1985) Conceptual and theoretical dilemmas facing social support. In I. G. Sarason and B. R. Sarason (Eds.) *Social support: Theory, research and applications*. The Hague, The Netherlands: Martinus Nijhoff Publishers, pp. 3-20.
- 山本和郎 (1986) コミュニティ心理学 —地域臨床の理論と実際—. 東京大学出版会.

**資料 1 Social Support Questionnaire (SSQ)**

---

The following questions ask about people in your environment who provide you with help or support. Each question has two parts. For the first part, list all people you know, excluding yourself, whom you can count on for help or support in the manner described. You may either give the person's initials or their relationship to you. *Do not list more than one person next to each of the letters beneath the question.*

For the second part, circle how satisfied you are with the overall support you have.

If you have no support for a question, check the word "No one", but still rate your level of satisfaction. Do not list more than nine persons per questions.

Please answer all questions as best you can. All your response will be kept confidential.

---

1. Whom can you really count on to listen to you when you need to talk?
2. Whom could you really count on to help you if a person whom you thought was a good friend insulted you and told you that he /she didn't want to see you again?
3. Whose lives do you feel that you are an important part of?
4. Whom do you feel would help you if you were married and had just separated from your spouse?
5. Whom could you really count on to help you out in a crisis situation, even though they would have to go out of their way to do so?
6. Whom can you talk with frankly, without having to watch what you say?
7. Who helps you feel that you truly have something positive to contribute to others?
8. Whom can you really count on to distract you from your worries when you feel under stress?
9. Whom can you really count on to be dependable when you need help?
10. Whom could you really count on to help you out if you had just

- been fired from your job or expelled from school?
11. With whom can you totally be yourself?
  12. Whom do you feel really appreciates you as a person?
  13. Whom can you really count on to give you useful suggestions that help you to avoid making mistakes?
  14. Whom can you count on to listen openly and uncritically to your innermost feelings?
  15. Who will comfort you when you need it by holding you in their arms?
  16. Whom do you feel would help if a good friend of yours had been in a car accident and was hospitalized in serious condition?
  17. Whom can you really count on to help you feel more relaxed when you are under pressure or tense?
  18. Whom do you feel would help if a family member very close to you died?
  19. Who accepts you totally, including both your worst and your best points?
  20. Whom can you really count on to care about you, regardless of what is happening to you?
  21. Whom can you really count on to listen to you when you are very angry at someone else?
  22. Whom can you really count on to tell you, in a thoughtful manner, when you need to improve in some way?
  23. Whom can you really count on to help you feel better when you are feeling generally down-in-the-dumps?
  24. Whom do you feel truly loves you deeply?
  25. Whom can you count on to console you when you are very upset?
  26. Whom can you really count on to support you in major decisions you make?
  27. Whom can you really count on to help you feel better when you are very irritable, ready to get angry at almost anything?

---

(註) 回答は、各項目について回答者が提示した氏名から人数を査定する。SSQN, 各項目についての満足度を「大変不満 (very dissatisfied)」から「大変満足 (very satisfied)」までの6件法で査定する SSQS の2つからなる。SSQN, SSQS 共に27項目の「平均値」が指標として使用される。

**資料 2 Interpersonal Support Evaluation List (ISEL)**

This scale is made up of a list of statements each of which like may or may not be true about you. For each statement we would like you to circle *probably* TRUE(T) if the statement is true about you or *probably* FALSE(F) if the statement is not true about you.

You may find that many of the statements are neither clearly true nor clearly false. In these cases, try to decide *quickly* whether probably TRUE(T) or probably FALSE(F) is most descriptive of you. Although some questions will be difficult to answer, it is important that you pick one alternative or the other. Remember to circle only one of the alternatives for each statement.

Please read each item quickly but carefully before responding. Remember that this is not a test and there are no right or wrong answers.

(Appraisal)

- T 1. There is at least one person I know whose advice I really trust.
- F 2. There is really no one I can trust to give me good financial advice.
- F 3. There is really no one who can give me objective feedback about how I'm handling my problems.
- T 4. When I need suggestions for how to deal with a personal problem I know there is someone I can turn to.
- T 5. There is someone who I feel comfortable going to for advice about sexual problems.
- T 6. There is someone I can turn to for advice about handling hassles over household responsibilities.
- F 7. I feel that there is no one with whom I can share my most private worries and fears.
- F 8. If a family crisis arose, few of my friends would be able to give me good advice about handling it.
- F 9. There are very few people I trust to help solve my problems.
- T10. There is someone I could turn to for advice about changing my job or finding a new one.

(Belonging)

- T 1. If I decide on a Friday afternoon that I would like to go to a

「ソーシャル・サポート研究」の現状と課題

movie that evening, I could find someone to go with me.

- F 2. No one I know would throw a birthday party for me.
- T 3. There are several different people with whom I enjoy spending time.
- F 4. I don't often get invited to do things with others.
- T 5. If I wanted to have lunch with someone, I could easily find someone to join me.
- F 6. Most people I know don't enjoy the same things that I do.
- T 7. When I feel lonely, there are several people I could call and talk to.
- T 8. I regularly meet or talk with members of my family or friends.
- F 9. I feel that I'm on the fringe in my circle of friends.
- F10. If I wanted to go out of town (e. g., to the coast) for the day, I would have a hard time finding someone to go with me.

(Tangible)

- T 1. If for some reason I were put in jail, there is someone I could call who would bail me out.
- T 2. If I had to go out of town for a few weeks, someone I know would look after my home (the plants, pets, yard, etc.)
- F 3. If I were sick and needed someone to drive me to the doctor, I would have trouble finding someone.
- F 4. There is no one I could call on if I needed to borrow a car for a few hours.
- T 5. If I needed a quick emergency loan of \$100, there is someone I could call to come get me.
- F 6. If I needed some help in moving to new home, I would have a hard time finding someone to help me.
- F 7. If I were sick, there would be almost no one I could find to help me with my daily chores.
- T 8. If I got stranded 10 miles out of town, there is someone I could call to come get me.
- T 9. If I had to mail an important letter at the post office by 5:00 and couldn't make it, there is someone who could do it for me.
- F10. If I needed a ride to the airport very early in the morning, I would have a hard time finding anyone to take me.

(Self-esteem)

- F 1. In general, people don't have much confidence in me.
  - T 2. I have someone who takes pride in my accomplishments.
  - F 3. Most of my friends are more successful at making changes in their lives than I am.
  - T 4. Most people I know think highly of me.
  - F 5. Most of my friends are more interesting than I am.
  - T 6. I am more satisfied with my life than most people are with theirs.
  - F 7. I have a hard time keeping pace with my friends.
  - F 8. I think that my friends feel that I'm not very good at helping them solve problems.
  - T 9. I am closer to my friends than most other people.
  - T10. I am able to do things as well as most other people.
- 

(註) 出典は Cohen ほか (1985) より. T (正)・F (誤) はソーシャル・サポートとしてコード化される反応を示す (回答は T・F の2件法). 4つのカテゴリー別に加算, または全得点を加算して指標として用いる.



### 資料 3 Inventory of Socially Supportive Behaviors (ISSB)

---

(Please rate the frequency with which each of the 40 items occurred during the preceding month using the following 5-point scale.)

---

1. Looked after a family member when you were away.
2. Was right there with you (physically) in a stressful situation.
3. Provided you with a place where you could get away for a while.
4. Watched after your possessions when you were away (pets, plants, home, apartment, etc.)
5. Told you what she/he did in a situation that was similar to yours.
6. Did some activity together to help you get your mind off of things.
7. Talked with you about some interests of yours.
8. Let you know that you did something well.
9. Went with you to someone who could take action.
10. Told you that you are OK just the way you are.
11. Told you that she/he would keep the things that you talk about private—just between the two of you.
12. Assisted you in setting a goal for yourself.
13. Made it clear what was expected of you.
14. Expressed esteem or respect for a competency or personal quality of yours.
15. Gave you some information on how to do something.
16. Suggest some action that you should take.
17. Gave you over \$25.
18. Comforted you by showing you some physical affection.
19. Gave you some information to help you understand a situation you were in.
20. Provided you with some transportation.
21. Checked back with you to see if you followed the advice you were given.
22. Gave you under \$25.
23. Helped you understand why you didn't do something well.
24. Listened to you talk about your private feelings.
25. Loaned or gave you something (a physical object other than money)

- that you needed.
26. Agreed that what you wanted to do was right.
  27. Said things that made your situation clearer and easier to understand.
  28. Told you how he/she felt in a situation that was similar to yours.
  29. Let you know that he/she will always be around if you need assistance.
  30. Expressed interest and concern in your well-being.
  31. Told you that she/he feels very close to you.
  23. Told you who you should see for assistance.
  33. Told you what to expect in a situation that was about to happen.
  34. Loaned you over \$25.
  35. Taught you how to do something.
  36. Gave you feedback on how you were doing without saying it was good or bad.
  37. Joked and kidded to try to cheer you up.
  38. Provided you with a place to stay.
  39. Pitched in to help you do something that needed to get done.
  40. Loaned you under \$25.

---

(註) 出典は Barrera ほか (1981) より。回答は全くなし (not at all)/1度か2度 (once or twice)/週に1度くらい (about once a week)/週に何度も (several times a week)/ほとんど毎日 (about everyday), の5件法による。教示の部分は実際に質問紙に適用されているものが報告されているわけではないので、括弧を付けてある。Stokesら (1984) の因子分析の結果は、情緒的サポートが 31, 18, 10, 29, 30, 24, 2, 14, 実体的・物質的援助が 4, 38, 34, 17, 39, 1, 3, 認知的情報・フィードバックが 28, 5, 36, 27, 7, 6, 33, 37, 16, 15, 指令的指針が 21, 13, 22, 32, 17, 12, 23, 19, として項目が抽出されている (項目の順番は因子負荷量の高いものから提示)。通常は40項目の全得点を加算して指標とする。